＜論文＞

第二次世界大戦以前における カナダ人婦人宣教師たちの日加交流

－東洋英和女学校のスクラップブック（1889-1938）の分析から－ [1]

松　本　郁　子

1．はじめに―ミッションスクールという日加交流の場―

2018 年および 2019 年は日加修好 90 周年にあたる。日加交流史の研究では、外交や移民に関する研究が多くみられ、特に移民研究の蓄積は厚い。それに比して、カナダ系ミッションの日本宣教活動への関心は高くはない。しかし、正式な日加国交樹立の 50 年以上前に来日し、日本の社会と文化に影響を与えたカナダ人宣教師の存在は、日加関係を語るうえで看過できないだろう。多くの宣教師たちは宣教活動を行うため何十年という歳月を日本で過ごし、日本社会に密着し日本人との親密な交流を図った。そこには異教の地である日本に、キリスト教を根付かせるという強い使命感が働いていた。

カナダ人宣教師による日本宣教活動については、ハミッシ・アイオン（Hamish Ion）の先行研究が知られている。アイオンは「カナダ人宣教師が日本で行った意義深い諸活動のなかで、近代的教育、とくに女子教育の促進には、傑出したものがある」と述べ、婦人宣教師たちが担当した女子教育事業について高く評価している [2]。しかし、その功績は往々にして歴史のなかで触れられていないとも指摘されている [3]。

本稿は、そうした女子教育事業を展開した婦人宣教師たちの創設による東洋英和女学校（現 東洋英和女学院）における教育宣教活動を研究対象とし、日本側に残された資料からその歴史を照射することを目的としている。東洋英和女学校は、カナダ・メソジスト教会（現 カナダ合同教会）の婦人ミッションである Woman's Missionary Society（以下、「WMS」と略記）から日本に派遣されたマーサ・ジュリア・カートメル（Martha Julia Cartmell）により 1884 年に創設された。爾来、若干の土地の変遷はあるものの、創立の地である東京の麻布鳥居坂（現 六本木）の地に今も存続している。開校時の東洋英和女学校は、鹿鳴館に代表される明治政府の欧化主義政策の時流に乗り、好調な滑り出しをみせた。しかし明治 20 年代以降、日本の国家体制の強化にともない、他のミッションスクー

ル同様、東洋英和女学校も日本政府による教育政策や宗教政策と折々拮抗し、国際関係の情勢の変化を受け、さまざまな局面を迎えていった。

アイオンは、1930 年代にはカナダ人宣教師たちの日本人への深い共感と好意から、日本の政治的・軍事的主導者たちが東アジアに危機をもたらし、中国との戦争を画策していった動機を見分けられなくなっていったとも指摘している[(4)]。こうした先行研究の指摘について、本稿では東洋英和女学校の歴代の婦人宣教師たちが残したスクラップブックの分析にもとづき検証を行っていくとともに、日本社会におけるカナダ人婦人宣教師たちの活動と戦前期までの日加交流を明らかにしていきたい。

２．東洋英和女学院所蔵のスクラップブックについて

東洋英和女学院史料室には 1 冊のスクラップブックが残されている（このスクラップブックには題字等が無く、「初期スクラップブック」などの通称があるが、本稿では単に「スクラップブック」と記す）。これは、縦 30 センチ、横 25 センチほどの黒い表紙の冊子で、歴代の婦人宣教師校長によって 79 ページにわたり写真や資料が貼り込まれ、代々校長室に継承されていったものと推察されている。スクラップブックに貼り込まれた資料は、表 1 のように分類される。また、スクラップブックに貼り込まれた資料から推定される作成期間中には、表 2 に示したように第 2 代から第 17 代までの、のべ 16 人の婦人宣教師が校長を務めている。

表１　スクラップブックに貼り込まれた資料の分類

種類	数	備考
卒業式式次第資料	43	
写真	26	学校役員、校舎内観などの写真
記念式典関連資料	13	周年行事、校舎新築記念などの資料
諸行事関連資料	12	運動会、文芸会（学芸会）、特別礼拝などの資料
追悼行事関連資料	8	関係者の葬儀次第、学校行事「追悼記念日礼拝」などの資料
新聞の切り抜き	8	マーラー公使夫妻来校、新校舎竣工、教育会議などの記事
書簡	3	カナダ・ミッションからの祝辞・弔辞
時候の挨拶状	2	クリスマスカードなど
その他	3	昭和天皇即位式が描かれた薄手織物など
計	118	

スクラップブックにより筆者作成

表１によると、もっとも点数が多いのは卒業式の式次第資料であり、卒業生氏名が掲載されるため記録として重要だったと思われる。式次第は、式典の来賓の顔ぶれや「君が代」斉唱の状況など、社会と東洋英和女学校との接点を検討していくうえで有益な資料となっている。また、点数は少ないものの、新聞の切り抜きも宣教師の社会的関心事を知るうえで重要である。

表２　東洋英和女学校の婦人宣教師校長（1884 ～ 1938 年）

代	氏名	在任期間	備考
1	M.J. カートメル	1884 ～ 1885	
2	E.J. スペンサー （結婚後、Mrs. ラージとなる）	1885 ～ 1890	1889 年にスクラップブックへの貼り込みが始まる
3	I.S. ブラックモア	1890 ～ 1891	
4	J.K. マンロー	1891 ～ 1893	
5	N.G. ハート	1893 ～ 1894	
6	J.K. マンロー	1894 ～ 1896	
7	I.S. ブラックモア	1896 ～ 1900	
8	M.A. ヴィーゼー	1900 ～ 1904	
9	A. キラム	1904 ～ 1904	
10	I.S. ブラックモア	1904 ～ 1912	
11	M. クレイグ	1912 ～ 1916	
12	E. キャンベル	1916 ～ 1918	
13	M. クレイグ	1918 ～ 1922	
14	I.S. ブラックモア	1922 ～ 1925	
15	F.G. ハミルトン	1925 ～ 1930	
16	J. M. キニー	1930 ～ 1931	
17	F.G. ハミルトン	1931 ～ 1938	1938 年にスクラップブックへの貼り込みが終わる

『東洋英和女学院 120 年史』により作成

このスクラップブックには、貼り込まれた資料を注釈する書き込みはほとんどなく、一見、時系列に沿った単体の資料の寄せ集めにすぎないように思われる。しかし、ほぼ 50 年にわたる記録の集積に一つの運営体の連続性を措定し、丹念に資料を読み解いていくと、婦人宣教師たちが何を顕彰し記録すべきであると考えたのかが見えてくる。

３．国交樹立以前からの日加交流の様相

スクラップブックの資料は、1889 年の閉校式の式次第が最も古い。この年、日本では大日本帝国憲法が発布され、近代立憲国家としての日本の国家体制強化の動きが顕著になっていく社会状況にあった。東洋英和女学校ではこの 1889 年の閉校式とともに第 1 回英語科卒業式が行われている。

スクラップブックの最初のページには、木造校舎（1900 年竣工）の写真が貼られており、その下には「〔私たちの目指すところは〕手にて有用なる技工を練り頭に明瞭なる思考力を養ひ兼て克己の精神を修養するにあり（We aim to train “the Hand to useful doing, the Head to clear thinking, and the Heart to unselfishness.”）」と印刷された紙片が貼り込まれている。この木造校舎時代の東洋英和女学校の卒業生である村岡花子の随筆 (5) によれば、この文面は村岡の恩師の婦人宣教師で第 3・7・10・14 代校長を務めたイサベラ・スレード・ブラックモア（Isabella Slade Blackmore 日本駐在 1889 ～ 1925 年）の教育信条として紹介されている。ブラックモアは、35 年以上にわたり日本に駐在し、4 回も校長を務め、東洋英和女学校の発展に尽くした。

ブラックモア校長の時代、幕末に幕府が諸外国と締結した条約が改正されるに至った。それに伴い、居留地に居住を制限されていた外国人に「内地雑居」が許されたことで、キリスト教が国内各地に広まることが危惧された (6)。日本政府はキリスト教学校の台頭も恐れ、その活動を阻止する施策を次々と打ち出していく。改正条約実施の年となる 1899 年にはキリスト教を公認しつつも宗教施設の取締が意図された「内務省令四十一号」が 7 月 27 日に発布され、キリスト教学校にとって不利な条項を含む「私立学校令」およびキリスト教学校での宗教教育の禁止を企図した「文部省訓令十二号」が 8 月 3 日に発される (7)。

ブラックモアはその当時、前述の木造校舎の新築計画を立て、学則の改正を計画中であったが、日本の法令の動向を慎重に見定めた。男子の学校の場合は、キリスト教を堅持し各種学校になることは上級学校への進学資格や徴兵猶予において不利益を被るのに対し、女子の学校はその限りではなかった。そのためブラックモアは、同年 9 月 14 日付で「本校ハ基督教主義ヲ本トシ…」という従来学則に記載されていなかった「基督教主義」の文言を盛り込み、設立目的を改正した書類を東京府知事に提出した (8)。同じカナダ・メソジスト教会の男性宣教師によって設立・運営されていた東洋英和学校（男子校）がこの訓令を機にキリスト教主義を断念し廃校した一方で、東洋英和女学校ではブラックモアの学校改革が続行された。スクラップブックの巻頭を飾るのは、キリスト教に対する日本政府の圧力のもとで、キリスト教主義教育の貫徹を表明し、生徒が激減するおそれもあったなかで、訓令の翌年に建設された新校舎の写真であった。

ブラックモアが在任中の 1902 年 1 月には日英同盟が締結され、大英帝国の一翼とみ

なされていたカナダの学校として、東洋英和女学校の評判は上がったという。日本が英国との友好な関係にあることは、日本社会における東洋英和女学校の地位を高めた。スクラップブックには記録が無いが、第一次世界大戦下の 1918 年には英国コンノート殿下（Prince Arthur Duke of Connaught）が英国国王の名代として来日し、6 月 27 日に東洋英和女学校を訪れている。そこで読み上げられた歓迎の辞（ブラックモアが原稿を執筆し、生徒が朗読）には、日本と英国との友好、東洋英和女学校が英国王室と英国、さらにはカナダ人教師たちと強い紐帯で結ばれ、英国の言語や歴史や文学について敬意を持って学んでいること、またヨーロッパにおいてカナダとカナダ軍が英国と共に戦っていることは、より親密な意義をこの訪問に添えている旨が語られている[(9)]。小さな私立学校における記録ではあるが、歓迎の辞にも、第一次世界大戦期の日本と英国とカナダの関係性が如実に反映されており、カナダの在外公館が無い時代に、ミッションスクールがひとつの国際交流の場として機能していたことがうかがえる。

また、ブラックモア時代の貼り込みで注目されるのは周年行事関連の資料である。東洋英和女学校では、ブラックモアによって 1909 年の創立 25 周年を皮切りに、5 年ごとに祝賀を行うことが定められていく。ブラックモアは、カナダの宣教本部に宛てた書簡のなかで、25 周年記念行事として開催された「両親の日」と称する保護者とカナダ人と日本人の両方の教職員を交えた歓迎会について「これは私たちが世に訴える唯一の宣伝―生きた宣伝―で、それは非常に効果的です」とコメントしている[(10)]。周年行事はただの内々の行事ではなく、その機会に日本社会に自分たちの学校の存在を明確にアピールしていくことがブラックモアには強く意識されていた。

スクラップブックにはカナダ本部の WMS 幹部であるロス夫人（Mrs. Ross）やストローン夫人（Mrs. Strachan）からの 25 周年への祝辞の書簡も収められており、ストローンの祝辞は式典当日に読み上げられたことがキリスト教系の新聞で報じられている[(11)]。日本におけるキリスト教信仰にもとづく女子教育の伸展を、カナダの WMS 会員たちも見守っていた。カナダでは、WMS の年次報告書やカナダ・メソジスト教会が発行する広報誌が日本の事情や日本宣教の成果を伝え、賜暇休暇で帰国する宣教師たちは日本での体験を語り、宣教のためのより多くの寄付金募集と次世代の宣教師への感化を促そうとしていた。プライベートセクターによる規模の国際交流ではあったが、宣教事業を通じた日本とカナダの結びつきは濃密であった。日本での周年行事はカナダの教会の信徒にとっても、自分たちの宣教支援の成果を確認できる機会であった。その後もスクラップブックには、各周年行事の記録が貼り込まれていった。

その他、スクラップブックには、26 点ほどの写真も収められており、学校生活の様子を知るよき手がかりとなっている。教職員や役員の写真、体操の授業風景、寄宿舎の食堂での食事風景、校長室、教室の風景などが収められている。そのうち「西洋料理室」について『東洋英和女学校五十年史』には、1908 年の校舎増築の際に、カナダ・トロン

トの富豪である「リリアン・マセー〔ママ〕・ツレブル夫人」の寄付があり、The Lilian Massey Hall と呼ばれたとある[12]。マッセイ一家は熱心なメソジスト教会の信者であり、19 世紀末にその教会への寄付が教会の財政基盤を底上げしたほどだったという[13]。また、リリアン・マッセイのような富裕者に限らず、カナダの WMS の婦人会員たちは、小さな日常の奉仕活動から少しずつ資金を得て、宣教師の活動のために寄付を行っていた。遠く離れたカナダの地から熱心な教会信徒の寄付が行われ、宣教地における女学校の経営に活用されていたことがこうした資料からもうかがえる。

４．マーラー公使と東洋英和女学校の交流

35 年以上にわたり日本に滞在し、数々の教育・社会事業を行ったブラックモアは 1925 年に引退し、カナダに帰国する。その後、東洋英和女学校の校長には、ブラックモアよりも 25 歳若く、コロンビア大学で教育学の修士号を取得したフランシス・ガートルード・ハミルトン（Frances Gertrude Hamilton 日本駐在 1917 ～ 1942 年および 1947 ～ 1956 年）が就任する。

ハミルトンが校長に就任した 1925 年には、カナダ・ミッション側に大きな変化があり、カナダ・メソジスト教会はカナダ合同教会に統合される。カナダ合同教会は、おもにメソジスト派教会、会衆派教会、長老派教会の 3 教派の教会の合同によって設立された。このような大規模な教会合同はキリスト教世界においても特筆すべき出来事であり、この合同によってカナダ人の 5 分の 1 がカナダ合同教会に属し[14]、カナダ合同教会はプロテスタント教会最大の教派となった。カナダ合同教会は、1924 年 7 月 19 日裁可の An Act incorporating The United Church of Canada（The United Church of Canada Act カナダ合同教会法）においても「国民的（national）」な教会たらんことを表明し、国家としてカナダが一つになるための国民の精神的な土壌を培うような、国家の規模に見合うような教会を形成していくという理想が掲げられた[15]。

諸教派が 1885 年に合同の可能性を模索してからこの教会合同に至るまで、40 年ほどの年月を要したが、その間にカナダとニューファンドランド[16]は第一次世界大戦に参戦し、当時のカナダの人口 800 万人（ニューファンドランドを除く）に対し、63 万人の兵士がヨーロッパに送られ、そのうち 1 割に近い 6 万 1000 人が戦死し、17 万 2000 人が負傷するという大きな被害を受ける。この経験はカナダに大英帝国との統合強化よりも帝国からの究極的自立を求める契機をもたらし、カナダ・ナショナリズムが高揚していく[17]。それゆえにカナダは大英帝国からの外交的自立の一環として、1927 年にはアメリカのワシントンに、1928 年にはフランスのパリ、そして、1929 年にはアジアで勢力を増し貿易・移民問題も抱える日本に公使館を設置する[18]。日本とカナダの正式な国交

樹立の背景にはこのようなカナダの事情があった。

カナダ合同教会の誕生にせよ、日加国交樹立にせよ、カナダにおける自国意識の高まりやカナダ・ナショナリズムの伸展という大きな変化がみられた時代に、東洋英和女学校のハミルトンは校長としての責務を負っていた。ハミルトンは、婦人宣教師運営の家塾的だった学校を刷新すべく、官立学校出身の日本人教師を着任させ、外国人教師主導から日本人教員に運営の実質を委ねていく方向性を打ち出す[19]。また、校章、制服、学校標語、校歌を制定し、学校の財団法人化を果たすなど、日本の学校としての東洋英和女学校の機構を整備していった。ハミルトンの時代には校地の拡大・整備も行われ、1933 年にはウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories）の設計による新しい校舎も落成する。スクラップブックには 1933 年竣工の新しい校舎の落成式の式次第も残されている。そこには、カナダの国樹である楓のなかに東洋英和のイニシャルである「T」と「E」がデザインされた、楓のマークの東洋英和女学校の校章が刷られている。そして、この落成式パンフレットには「カナダ合同教会婦人ミッション創設五〇周年記念事業」という文言が記載されている。半世紀におよぶ宣教の功績を祝賀するタイミングで、東洋英和女学校では新校舎の建設が用意されていた。当時、世界恐慌により日本だけでなく本国カナダでも深刻な経済危機が訪れ、それはカナダ合同教会からの日本の教会や学校への送金にも大きな影響を及ぼした[20]。その苦境を乗り越え、宣教 50 周年、さらには学校創立 50 周年の顕彰のために建設されたのがヴォーリズ設計の新校舎であり、この校舎建設に関する新聞記事もスクラップブックには数点貼り込まれていた。

そして、ハミルトン校長時代の資料には、ハーバート・マーラー（Herbert Marler）駐日本カナダ公使との交流の記録が散見される。カナダ公使館は、国際社会における日本の台頭を背景に開設されたが、先行して日本の事情に通じていた宣教師たちとマーラーが交流していた事実をスクラップブックからうかがい知ることができる。マーラーに関する初出の資料は「マーラー公使カナダの学校の事業を称賛」という新聞記事である[21]。記事を要約すると、1930 年 2 月にマーラー夫妻が中国訪問の前に東洋英和女学校を訪問し、ハミルトン校長が当日の来校歓迎式を取り仕切り、東洋英和女学校の生徒が英語でカナダ国歌を合唱したところ、マーラー夫妻はカナダの学校でさえも聞いたことがないほど上手であるとその歌唱を賞賛したという。また、ハミルトンは、カナダ人による東洋英和女学校の創設と学校運営が前途洋々であることを説明し、マーラー夫妻もこれを機に今後も学校を訪れることを希望し、カナダ政府の名の下に、ハミルトンと日本においてカナダのために優れた働きを行っている同胞の人々に対して謝意を示したという。最後に生徒たちは英語で英国国歌を歌い、その場のすべての人々がそれに加わり合唱したと記載されている。

この新聞記事は公使による学校訪問の何気ない一コマを紹介しただけのようにも見えるが、日加関係の要諦に通じるさまざまな要素を含んでいる。カナダ公使館が日本に開

設されたのは、カナダ国内の中国人・日本人移民問題も一因であり[22]、カナダの外交政策は日本を拠点に据えつつ中国も視野に入れていた。マーラー夫妻はまさに中国訪問の前に東洋英和女学校を訪問している。日本と中国からの移民の問題について任務を担ったマーラー公使は、日本において西洋式の生活様式を身に付け、英語教育を施されて巧みにカナダ国歌を合唱する日本人の少女たちを目の当たりにした。マーラー公使の東洋英和女学校訪問は、一見かけ離れて見える日本人移民の問題と宣教事業との接点を表出する機会となっている。カナダ本国において、日本人移民を含む「新しいカナダ人」である移民たちをどのように国家形成に位置付けていくのかは、この時期の大きな問題だった。そうした国内事情のなかで、「国民的な教会」たることを標榜し、国に奉仕する教会であることを掲げていたカナダ合同教会の国内宣教事業は移民問題と直結していた。カナダ合同教会の国内宣教は、政府の方針に沿いながら、急増する移民をプロテスタントのキリスト教徒に改宗させ、彼らに近代的な教育や医療を施すことを目指していた。そして、全世界に赴いてキリスト教を宣教するという使命のもと、海外宣教は国内宣教と併行して行われていた。カナダ・メソジスト教会、のちにはカナダ合同教会においては、カナダ国内の日本人移民が国内宣教の対象である一方で、日本における海外宣教事業もまた、異教徒である日本人にキリスト教と西洋式の教育を浸透させることを目指した。こうした移民政策や宣教事業をめぐる背景が、マーラー公使の東洋英和女学校訪問において交錯している。婦人宣教師たちは 40 年の歳月をかけて、日本における「改宗」と「教育」の実績を積み上げていた。

ところで、この記事では東洋英和の生徒が英語でまずカナダ国歌（Canadian National Anthem）を合唱し、式の最後に英国国歌（British National Anthem）を合唱したことが記録されているのは興味深い。記事中の「カナダ国歌」が現行の国歌である「オー・カナダ（O Canada）」[23] であったのかは確定できないが、この公使訪問後、何度か東洋英和の式典で「カナダ国歌」が歌われていることがスクラップブックの資料で確認されている。前述した 1918 年の英国コンノート殿下来校は第一次世界大戦終結前の時代であり、ヨーロッパにおいてカナダとカナダ軍が英国と共に戦っていることを名誉とする祝辞が読み上がられた。しかし、時代が変わって、カナダは外交上の自立を得て、独自の公使を日本に送り込み、カナダ国歌がこうした式典の場で斉唱されるに至った。すなわち、学校式典の構成要素の変遷にも世界外交のバランスが映し出されているといえる。

マーラーの東洋英和女学校訪問は、公使館が東京にあったことから頻繁だったらしく、スクラップブックに貼り込まれた卒業式や大きな学校行事のプログラムには、しばしば来賓としてマーラーの名前が掲載されている[24]。卒業式などに参列したマーラー夫妻の写真も東洋英和女学院史料室には多く残されている。たとえば、1934 年の創立記念 50 周年の記念式の写真には、マーラーが祝辞を述べ、同じ壇上にはハミルトン校長、WMS 代表シビル・コーテス（Sybil Courtice　日本駐在 1910 ～ 1943 年および 1946 ～ 1949 年）

のほか、通訳担当の村岡花子、海軍大将・内閣総理大臣・内大臣などを歴任した齋藤實子爵などが同席していた様子が写されている。また、カナダ合同教会の男性・女性双方の宣教師が集まる年次評議会の写真（東洋英和女学院史料室所蔵）にもマーラー夫妻の参加が確認できる。1930 年代当時において、国交樹立に先行して日本社会に根を下ろしていたカナダ人宣教師たちの存在は、現在想像するよりも大きな存在としてマーラー公使ら外交官に認識されていたことだろう。それゆえに、マーラー公使の日本観や日本の歴史の解釈に、少なからず宣教師たちが影響を与えた可能性は高い。なお、東洋英和女学院史料室にはマーラーに代わって着任したランドルフ・ブルース（Randolph Bruce）公使の 1937 年の歓迎レセプションの写真も残されている。

５．親日派のカナダ人宣教師たち

ここまで、スクラップブックの資料をもとに東洋英和女学校というミッションスクールの変遷を概観してきた。日本におけるカナダ人宣教師の活動についてアイオンは、ジョセフ・ナイ（Joseph Nye）が提唱したソフトパワーとして、カナダ人宣教師が日加関係にもたらしたインパクトと意義を認め、次のように彼らの活動を評価した。すなわち、日本とカナダが正式な外交関係を結ぶはるか以前に宣教師が行った活動は、ほかのどのつながりよりも人的なレベルでの友好関係の土台を築き上げた。たとえば、カナダのキリスト教コミュニティでは、教会の発行する宣教師からの現地報告が掲載された雑誌や新聞、日曜学校への宣教師からの手紙などが継続的に読まれていた。カナダの人々が日本の国情や日本人について知るのに宣教師は大きく貢献した。しかし、1930 年代には日本人への共感と好意ゆえに、宣教師たちは日本の政治的・軍事的主導者たちの意図を分別できなくなり、カナダにおいては宣教師の立場は危ういものになり、一方の日本においても天皇中心主義の軍国主義が台頭し、宣教師たちは西洋的な民主主義的価値観の移入に失敗し、日本のキリスト教界からも孤立し、帰国を余儀なくされていった[(25)]。そして、カナダ人宣教師による「宣教の時代」を失敗と総括している[(26)]。

そこで、アイオンの指摘をふまえ、1930 年代前後のスクラップブック資料を改めて検討したい。ここで注目されるのは、「即位式紫宸殿之図」「大嘗祭陛下進御之図」と題された薄い織物の貼り込みである。その上部には菊の紋章が切り抜かれ一緒に添付されている。これらは、1928 年 11 月に昭和天皇の即位式が行われた際に制作された記念品らしく、当時の校長であるハミルトンがスクラップブックに貼り込んだと推察される。

日本の軍国主義化において争点となっていく天皇制であるが、東洋英和女学校の婦人宣教師たちがどのように天皇をとらえていたのかについて少し考察しておきたい。ひとつの文脈として考えられるのは、英国国王の臣民としての意識が強かった当時のカナダ

人にとって、日本の皇室への敬意が素直に受け取られたという可能性である。天皇制の解釈と受容については時代ごとの背景を鑑みつつ、慎重な検討が必要ではあるが、学院創設者であるカートメルが来日時にも使用し、長年所持していた聖書には、「天皇陛下賛歌」という歌の歌詞の貼り込みが確認されている[27]。カートメルの聖書には多数の書き込みや貼り込みがあり、その多くが自身の人生の指針を聖書のなかの神の言葉に照らし合わせつつ記載かつ保管されたものであることからすると、ただ客観的な記録として「天皇陛下賛歌」が聖書に貼られたとは考え難い。

また、東洋英和女学校の学内のニュースなどには英国王室の話題が取り上げられ、学校行事のなかにも戴冠式を祝っての祝賀礼拝がもたれるなど、日本の皇室と並んで英国王室についても関心が高かった様子がうかがえる。

前述した 1930 年 2 月の新聞記事に紹介されたマーラー公使の挨拶にも次のような文言がみられる。すなわち、自分はジョージ 5 世国王（King George V）によりカナダの代表として命を受けたこと、日本の天皇が彼の名代として徳川家正氏を駐カナダ公使に指名したことは非常に大きな喜びであり、何にもまして東洋英和女学校の一同が保つべき品格の一つは忠誠心 (loyalty) であり、天皇への忠誠心は第一に行うべきことであり、カナダの学校の責任者はいかに忠実 (loyal) であることが大事かを教えることが肝心であると述べている。こうした記載から、カナダ人であるマーラーや日本在住のカナダ人宣教師たちは、自分たちにとっての英国国王の存在から類推し、天皇にある種の親近感を抱いていたという可能性が考えられる。

しかし、この新聞記事の翌年に勃発した 1931 年の満州事変以後、カナダを含め、世界各国は日本の軍事行為への疑惑を強めていく。さらに日本本土や植民地内においてクリスチャンにとって神社参拝の問題が浮上してくる。天皇統治体制のもと、国家神道が振興されていくが、それについてもカナダ人宣教師たちは自分たちの教育事業の存続のために、神社参拝は宗教行為ではないという日本政府の見解を受け入れ、アメリカ人宣教師[28]や植民地のクリスチャンたちが命懸けの抵抗を行ったのとは対照的な行動を取ったことも指摘されている[29]。

こうした先行研究の指摘をふまえると、1939 年に御真影が東洋英和女学校に奉戴された時、学内ニュース『東洋英和女学校 NEWS』（1939 年 2 月 25 日）に、WMS 代表のコーテスがキリスト教の教えと天皇制とを調和させた論説を掲載していたことが注目される。その論説でコーテスは、明治天皇の御製「目に見えぬ　神の心に　通ふこそ　人の心の　まことなりけり」を引用しつつ、「皆様の愛国心と忠義とを、日本を第二の故郷と致す私共も持つて居るつもりでございます。私が深く祈り願ふ事は東洋英和女学校の教師も生徒も学校の友である方々も皆等しく、奉仕の高い理想に向つて只管努め励み神の祝福によつてこの偉大な国のよき民として生きる事であります」と述べている。御真影を受け入れ、コーテスがこのようなコメントを寄せたことの真意についてはどのように考えるべきだ

ろうか。コーテス以外の個々の婦人宣教師たちの、日本の右傾化に対する見解を考察する手がかりがスクラップブックには散見される。

たとえば、スクラップブックに貼り込まれた 1930 年の秋に催された文芸会のプログラムでは、3 番目の演目に英語劇「戦争か平和か」が記載され、その演出指導に宣教師のジェニー・キニー（Janie Kinney）が当たっている。登場人物「戦争」は、軍威、流血があればこその平和だと主張するが、「平和」側は通商や文化、科学があってこそ平和が確立されると主張し、双方が自分の正当性を立証し合うというような筋立てになっている。この英語劇を指導したキニーは、東洋英和女学校に赴任する前、カナダの長老派教会から派遣され、1905 年から 1928 年の間、台湾の淡水女学校に着任した経験を持つ。日本統治下の台湾で 20 年以上の歳月を過ごしてきたキニーにとっての帝国日本の姿は、日本にのみ駐在していた宣教師たちとは違ったものであったと推量される。満州事変が起こる前年に、このような演目が学校で上演されていたことが確認できる。

また、校長だったハミルトンは時節柄、直接的な主張は控えつつも、戦時体制下にあっても国際平和の見地から事物を俯瞰する姿勢を持ち続けることを訴えていたように見受けられる。たとえば、スクラップブックの最後のページには 1935 年 8 月 1 日から 7 日にかけて開催された汎太平洋新教育会議の新聞記事が貼り込まれている。最後にこのスクラップブックを所持していたのは、メモの筆跡などからハミルトン校長と目され、この最後の貼り込みの日付のメモ書きも筆跡からハミルトンによるものと推察される。この新聞記事には「国際理解促進における教育の役目」であるとか、「教育が、より洗練された人間文化の実現に向かって世界の国々と人々を鼓舞する有効な力であることが明らかになるよう」といった主張の箇所に印がつけられている。この新聞記事をもって、スクラップブックは数ページの余白を残しながら終わる。後述するように、このスクラップブックは「1938 年」の資料がもっとも新しいものとして貼り込みが終わっている。この最終ページの記事は「1935 年」であるので、3 年ほどさかのぼってわざわざスクラップブックの最終ページに貼られたことになる。

スクラップブックの資料ではないが、1937 年 9 月 25 日の『東洋英和女学校 NEWS』の巻頭ページのトップ記事には、日中戦争の勃発が告げられ、日本の進撃を称賛する論調が展開されている。しかし、その重大な時局を告げる記事のすぐ下には、ハミルトン校長による「世界教育会議」の記事が併載され、世界平和の訴えがなされている。スクラップブックにおける 1935 年に遡った教育会議の貼り込みへのマーキングにせよ、校内新聞における世界平和に関する国際会議の記事掲載にせよ、当時の好戦的な世論に対するハミルトンの静かな異議申し立てを読み取ることができないだろうか。

最後に、スクラップブック以外の資料にもとづいてではあるが、コーテスについて考察しておきたい。コーテスは 1911 年に東洋英和女学校に着任し、1928 年から強制帰国させられる 1943 年まで日本側の WMS 代表を務め、終戦後の 1946 年にいち早く再来日

を果たした宣教師である。カナダ合同教会アーカイブズには、前年に日中戦争も勃発している時期の 1938 年 6 月 17 日、船でカナダに帰国するハワード・ノーマン（Howard Norman）に託されたコーテスによる書簡[30]が残されている。すでに郵便の検閲が想定されるなかで、コーテスは書簡が直接カナダの幹部たちに伝達される機会をねらって、普段は書けない日本の現状への感慨を述べている。

この手紙でコーテスは、日本と中国が戦争状態に突入したのには日本側にもいくつかの責任があるという事実はナイフのように自分の心を切り裂く…と綴り、人間の善意にもとづくキリスト教会の使命からすれば、戦争の脅威に屈してはならず、真実を見つめ、事実を覆い隠すプロパガンダに流されず、善意のキリスト教の教えは個々人の心のなかに存在しなければならないと主張している。さらには、そうではありながらも戦争は必要悪であり、国家は国民に究極の犠牲を要求しているという感覚や確信が、日本に蔓延していることを指摘している。自分たちが教えたキリスト教徒の青年が国のために命を捧げ、そのことが神聖視される現実を目の当たりにして、コーテスは「神の国を実現するための奉仕に対する自分の献身の足りなさを思い、恥じ入るばかりである」と述べている。また、キリスト教の幼稚園の事務員だった男性が陸軍病院で死にゆく時に、キリスト教信者として最後の祈りの時にも「天皇陛下、万歳」と敬礼して亡くなっていったことや、戦時体制下においてもコーテスたち外国人に親切に接する一般の日本人のエピソードなど、日本への愛着ゆえに大きな矛盾のなかで揺れ動くコーテスの心情が吐露されている。そしてカナダ本国の人々に向けて「我々にはあなた方の共感と助け、愛と祈りが今まで以上に必要です。今この時代に特別な必要を感じて苦しんでいる多くの人々のために暖かな気持ちを持ち続けてください」と懇願し、戦時体制下において手紙を書くこと、感情や考えを言葉にすることが困難であることを再度訴えて文章は終わっている[31]。検閲を経ない、稀な機会をとらえて記述されたこの書簡は、他のコーテスの書簡とは調子が異なるため、注目される。カナダ人宣教師たちは、日本で今まで自分たちが築き上げてきた教育事業や社会事業の存続、究極的にはキリスト教信仰の日本での存続を賭け、矛盾を抱えつつも御真影や神社参拝問題を受け入れ、言葉を使い分けながら、懸命の駆け引きを行ったであろうことをコーテスの書簡は示唆している。

６．おわりに

本稿ではカナダ婦人宣教師創設のミッションスクールに残された 1889 年から 1938 年までのスクラップブックの資料群を見ていくことで、日加間における半世紀におよぶ婦人宣教師による教育宣教事業の足跡を考察した。明治時代に学校が創設されたのちには、キリスト教排斥を企図した日本政府の教育政策・宗教政策に対処し、日英同盟時代には

英国王室の要人を学校に迎え、日本社会へのアピールも狙った周年行事を設定するなど、カナダ・ミッション運営の女学校は常に日本の政治や外交、社会の動きに適応していった。カナダ本国の婦人ミッションの会員や教会信徒からの人的・資金的援助に支えられながら、1925 年以降は本国の教会のカナダ合同教会への統合、第一次世界大戦後のカナダ・ナショナリズムの高揚、日加外交樹立、世界大恐慌といった出来事に対応し、宣教活動を基底に据えた教育事業を継続させ、日本社会にその存在を浸透させていった。しかし、1930 年代以降加速していく日本の右傾化に伴い、その宣教事業は解体の危機にさらされていく。

本稿で検討した婦人宣教師校長たちのスクラップブックは、1938 年 3 月印刷の昭和 12 年度卒業者名簿が最後の日付の資料となっている。その日付以降の資料が貼り足されることはなかった。この年、1938 年 1 月に東洋英和女学校ではハミルトンが校長を辞任し、代わって新たに日本人男性の小野直一が校長に就任した。

東洋英和女学校では 1935 年には御真影を奉戴しないことへの文部省からの照会を受け、その下付申請を余儀なくされていくなど、他のキリスト教学校同様、日本政府による関与が厳しさを増していった。そうした情勢を受け、ハミルトンの 3 回目の賜暇休暇を前にした 1937 年 1 月 27 日の東洋英和女学校の理事会記録には、ハミルトン校長からの報告があり、できるだけ早く日本人校長を迎えることがミッションの要望であるので、それについて協議したとの記載がある[32]。そうして 1937 年 5 月 19 日の常任理事会で、メソジストの信者である小野直一の経歴が提出され、7 月 7 日に勃発した盧溝橋事件が日中戦争に発展するなかで、同年 9 月 25 日の理事会において 1938 年 1 月 1 日付での小野の校長任命が決定された[33]。ハミルトンは 1938 年 1 月以降、一介の英語教師となり、同年 2 月 19 日に賜暇休暇に入っていく[34]。実に、スクラップブックの貼り込みが終わる 1938 年という年は、創設以来続いたカナダ人婦人宣教師校長時代の終焉と時を同じくしていた。

その後の東洋英和女学校の婦人宣教師たちの動向について簡略に述べておこう。1940 年 4 月には宗教団体法が施行され、文部大臣の認可のもと宗教団体は国民の教化活動のため動員されていく。その流れのなかでキリスト教会も教派合同を進め、海外ミッションと外国人宣教師は日本での宣教活動から排除されていった。日本において活動の余地を失い、開戦の危機も迫るなかで、多くの宣教師たちは帰国していく。しかし、ハミルトンと WMS 代表コーテスをはじめとする婦人宣教師数人は、なお日本に留まり、自分たちに残された学校での教育活動、保育事業、社会事業を通常通り継続していくことを決意していた。そうして 1941 年 12 月に太平洋戦争が勃発するが、WMS の宣教師たち 6 人は開戦後も日本に残留した。1942 年にはハミルトンたち 3 人が交換船でやむなく帰国し、残されたコーテスを含む 3 人の婦人宣教師たちは 1942 年 9 月、敵国人として田園調布にある菫家政女学院（現 田園調布雙葉学園）が警視庁抑留所となった収容所に収容

される。そして1年ほどの抑留生活ののち、1943年9月13日にWMSの宣教師たちはすべて交換船で帰国することとなった[35]。ここにおいて東洋英和女学校の婦人宣教師による日本宣教の歴史は大きな区切りを迎えた。

半世紀にわたるカナダ婦人宣教師による教育宣教事業の歴史は、本稿で考察してきたようにさまざまな局面を持つ。本稿は戦前までのスクラップブックの資料をもとにした考察に留まっているが、さらに戦中における婦人宣教師のカナダでの日系人強制収容所での教育奉仕活動、戦後の再来日と学校復興事業など、検証すべき業績は多々ある。婦人宣教師をふくめたカナダ系ミッションスクールやカナダ人宣教師についての研究が持つ広がりを加味しながら、日加交流史研究が今後さらに伸展していくことを期待したい。

注

(1) 本稿については、関係テーマで2018年12月6日に第51回関西学院史研究会で講義を行い、その記録が『関西学院紀要』第25号（2019年、103 － 129頁）にも掲載された。

(2) ハミッシ・アイオン「十字架の使節―カナダ人宣教師が日本に与えた影響―」ジョン・シュルツ・三輪公忠編『カナダと日本21世紀への架橋』彩流社、1991年、69頁。

(3) Hamish Ion, *The Cross in the Dark Valley: The Canadian Protestant Missionary Movement in the Japanese Empire, 1931-1945* (Waterloo: Wilfrid Laurier University Press,1999),4.

(4) Hamish Ion, "Soul Searcher and Soft Power: The Canadian Protestant Missionary Movement in Japan, 1873-1951," in Greg Donaghy and Patricia E. Roy, ed., *Contradictory Impulses: Canada and Japan in the Twentieth Century* (Vancouver: UBC Press, 2008), 12-13.

(5) 村岡花子『女学生の生活』実業之日本社、発行年不明、127 － 128頁（東洋英和女学院所蔵　村岡花子文庫1137）。村岡は、カナダの作家ルーシー・モード・モンゴメリ（Lucy Maud Montgomery）の *Anne of Green Gables* を『赤毛のアン』（1952年刊行）として翻訳したことで広く知られている

(6) 小川原正道『日本の戦争と宗教1899-1945』講談社、2014年、12頁。

(7) 同上、12―13頁、『東洋英和女学院百年史』1984年、92―96頁。

(8) 『東洋英和女学院百年史』、96―98頁。

(9) 『東洋英和女学校五十年史』1934年、258―260頁。

(10) 「カナダメソジスト教会宣教師―その人となりと信仰―（17）ミス・ブラックモアの手紙―5―」『敬和会』第53号、1990年8月、16頁。

(11) 『護教』1909年11月20日、956号。

(12) 『東洋英和女学校五十年史』、10頁。カナダ史との関わりでは、このリリアン・マッセイの甥にあたるのが初代の駐米公使であり、のちにカナダ人初の総督となるヴィンセント・マッセイである。ヴィンセント・マッセイ自身は、のちにアングリカンに改宗するものの、若いころにはカナダ・メソジスト教会の代表としてキリスト教史上有名な世界宣教会議のエディンバラ大会に参加するなど、メソジスト教会とのつながりは深い。ヴィンセント・マッセイについてはKaren Finlay, *The Force of*

Culture: Vincent Massey & Canadian Sovereignty (Toronto, Buffalo, London: University of Toronto Press, 2004) を参照。

⑬ Finlay, *The Force of Culture*, 27.

⑭ Phyllis Airhart, *A Church with the Soul of a Nation: Making and Remaking the United Church of Canada* (Montreal & Kingston, London, Ithaca: McGill-Queen's University Press, 2014), 10. 1931 年の時点でカナダの全人口に占めるカナダ合同教会のメンバー数（教会会員数、日曜学校の登録者数、葬儀数などから算出）の割合は 19.44 パーセントとなっている。

⑮ カナダ合同教会の設立については、内田政秀「カナダ合同教会の成立」『神学研究』13、1964 年、Airhart, *A Church with the Soul of a Nation* などを参照。カナダ合同教会の 1926 年の年鑑（*The United Church of Canada Year Book*,(1926), 330.）では「カナダ合同教会というのは国民的（national）な教会であり、その national というのは、国家にコントロールされることや、国家をコントロールすることを意味するのではなく、全国民に対し協力的な奉仕をすることを意味する」と記されている。カナダ合同教会は、国家が国民の信奉すべき宗教と定め国が保護する、いわゆる国教会ではなかったが、カナダの国民国家形成を支え、市民社会に深くコミットしていく教会組織として自らを位置付けていた。

⑯ 木村和男編『カナダ史』山川出版社、1999 年、年表 031 頁。

⑰ 同上、239 頁。

⑱ John Meehan, "Pacific Beginnings: Canada and Japan between the Wars, 1929-41," in Greg Donaghy and Patricia E. Roy, ed., *Contradictory Impulses: Canada and Japan in the Twentieth Century* (Vancouver: UBC Press, 2008), 82.

⑲ 『東洋英和女学院百年史』、229—230 頁。

⑳ Gwen Norman and Howard Norman, *One Hundred Years in Japan 1873-1973* (The Division of World Outreach, United Church of Canada, 1981), 352-359.

㉑ 『東洋英和女学校校友会誌』（1930 年）との照合によって、新聞記事の内容が 1930 年 2 月 20 日のマーラー夫妻の初来校についてであったことが判明した。

㉒ 木村和男、『カナダ史』、261 頁。

㉓ 「オー・カナダ」は 1880 年に作曲され、フランス語の歌詞がつけられ、その後 1908 年に英語の歌詞もつけられたが、正式な国歌として法律が制定され認知されたのは 1980 年 6 月である（『新版　史料が語るカナダ—1535-2007』有斐閣、2008 年、270 頁参照）。東洋英和女学院史料室には「オー・カナダ」の楽譜が残されているが使用年代不詳。

㉔ 東洋英和女学院史料室には、優秀な生徒に贈られたマーラー賞の記念品やマーラー賞受賞者へ贈呈された洋書が所蔵されている。

㉕ Ion, "Soul Searcher and Soft Power", 12-13.

㉖ Ion, *The Cross in the Dark Valley*, 1.

㉗ 「天皇陛下賛歌」の貼り込みについては『東洋英和女学院資料集 4』2016 年、245—246 頁、『東洋英和女学院資料集 5』2017 年、263—265 頁を参照。

㉘ カナダの宣教師は、北米の宣教師という括りでアメリカの宣教師と一緒に語られやすいが、国家の成り立ち、国民の在り方はカナダとアメリカでは異なっている。カナダ人宣教師の独自性については今後より研究されるべきだろう。

㉙ Ion, *The Cross in the Dark Valley*, 92/330.

㉚ The United Church of Canada Archives, WMS Dominion Board, Overseas Mis-

sion, Japan, Correspondence of Executive Secretary to Japan Mission 1938, Courtice to Taylor, 17 June 1938. この書簡の存在については、東洋英和女学院大学パトリシア・スィッペル教授にご教示いただいた。

(31) この書簡はアイオンの著作でも引用され、アイオンはその引用箇所をもとに、宣教師たちは彼らが誠実に愛した日本人と、日本の政府や軍隊の行為を区別できなくなってしまったことが問題だったと指摘している（Ion, *The Cross in the Dark Valley*, 121/221-222.）。アイオンは、ほかの宣教師の書簡の引用の場合は、その書簡が検閲されるおそれがなく書かれたという作成状況に厳密に言及しているのに対し、このコーテスの書簡に関してはその言及がなく引用も部分的である。そのため本稿では作成状況を明記し、より書簡の核心と思われる箇所を紹介した。

(32) 東洋英和女学校 “Tokyo Board of Directors,” Jan. 27th,1937.

(33) 同上、Sep. 25th,1937.

(34) 『東洋英和女学院百年史』、319 頁。

(35) パトリシア・スィッペル「緊迫する国際情勢下のコーテス書簡（1925-1941 年）を読む」『東洋英和女学院史料室委員会 史料室だより』No.89、2017 年、6 － 7 頁。

（まつもと いくこ、東洋英和女学院史料室／
東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学科博士課程）

Canadian Women Missionaries and Japan-Canada Relations before World War II: An Analysis of a Scrapbook Kept at Toyo Eiwa Girl's School 1889-1938

Ikuko Matsumoto

This paper aims to examine Japan-Canada relations in the era before World War II by analyzing a scrapbook maintained by successive principals of a school founded by Canadian women missionaries in Japan.

Toyo Eiwa Girl's School was established by Martha Julia Cartmell in 1884. Cartmell was the first overseas missionary sent by the Woman's Missionary Society (WMS) of the Methodist Church of Canada (MCC), one of the predecessors of the United Church of Canada. A succession of Canadian women missionaries followed Cartmell as principal, and each kept important historical records in a scrapbook.

The oldest document is the program of the school's first commencement, held in 1889. In that year, the Japanese government promulgated the Constitution of the Empire of Japan and promoted the formation of Japan as a modern constitutional nation-state. At first, the creation of Toyo Eiwa was welcomed by Japanese society as part of the favorable tide of Westernization led by the Japanese government. Subsequently, however, the progress of the school fluctuated under the influence of changing Japanese educational and religious policies, diplomatic relations, and other trends.

The scrapbook includes documents from two remarkable periods in which Toyo Eiwa was led by two excellent principals: Isabella Slade Blackmore, who worked in Japan from 1889 to 1925, and Frances Gertrude Hamilton, who worked in Japan from 1917 to 1942 and in the postwar era from 1947 to 1956.

The famous Japanese translator Hanako Muraoka, who translated *Anne of Green Gables*, was a scholarship student of Toyo Eiwa boarding school and was greatly affected by Blackmore's moral influence. Also, during the Blackmore era, in 1899, the Japanese government issued its Instruction No.12 which restricted religious education in Christian Schools as a means of preventing the spread of Christianity in Japan. Undeterred, Blackmore revised the school regulations at that very moment to declare that Toyo Eiwa Girl's School would be based on the spirit of Christianity as its top priority.

In 1902, the Anglo-Japanese Treaty was concluded, and Toyo Eiwa as a British-style school appeared favorably in Japanese society. In 1918, Prince Arthur, Duke of Connaught, the third son of Queen Victoria, visited Toyo Eiwa. Blackmore wrote a congratulatory address, in which she celebrated the friendship between Japan and Britain and expressed her pride in Canada's entry into World War I as a member of British Empire. Though there was no Canadian legation in Japan then, one private missionary girls' school played a remarkable role in the Japan-Canada relationship.

Toyo Eiwa was a missionary school supported by the WMS, which had many members in Canada. Therefore, WMS executives sent messages on Toyo Eiwa's 25th anniversary and like Lillian Massey of the wealthy Methodist Massey family donated equipment for the school. Many Canadian people knew of Japan and assisted Japanese girls' schools through the missionary work of the WMS.

After Blackmore, Hamilton became the principal in 1925, the year of the establishment of the United Church of Canada. At the same time, after World War I, Canadian nationalism and the desire to make a break with the colonial past emerged. Because of that, the Canadian legation was established at Tokyo in 1929. Some documents in the scrapbook demonstrate the friendly relations between Toyo Eiwa and the Canadian minister, Sir Herbert Marler, during the Hamilton era.

Hamilton transformed Toyo Eiwa into a standard Japanese girls' school and planned to hand over its leadership to Japanese staff. Amid the Great Depression, which inflicted deep damage in Japan and Canada, Hamilton completed a new school building to mark the 50th anniversary of WMS missionary endeavor in Japan and the foundation of the school.

Nevertheless, as Hamish Ion has pointed out, from the 1930s the viewpoints of Canadian missionaries in Japan gradually diverged from those of people in Canada. Though Japan became caught up in Emperor-centric militarism in the strained international situation after World War I, Canadian missionaries in Japan maintained a pro-Japanese attitude.

After 1938, the year in which the last document was attached to the scrapbook, how were their attitudes resolved? This paper examines some viewpoints of Canadian women missionaries of WMS towards Japanese militarism and their complicated strategy for surviving the extreme situation by staying in Japan. Some documents in the scrapbook suggest their interest in the Japanese Emperor, while showing their quiet insistence as pacifists.

(Toyo Eiwa Jogakuin Archives / The University of Tokyo, Graduate School)